

日英語完了・結果指向構文にみるモダリティとアスペクトの相関性

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田村, 敏広 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00027372">http://hdl.handle.net/10297/00027372</a>

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月13日現在

機関番号：13801

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16855

研究課題名(和文) 日英語完了・結果指向構文にみるモダリティとアスペクトの相関性

研究課題名(英文) Relations between Modality and Aspect in Result-oriented Constructions in Japanese and English

研究代表者

田村 敏広 (Tamura, Toshihiro)

静岡大学・情報学部・准教授

研究者番号：90547001

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の「てしまう」構文と英語のGet受動文に観察される話者の否定的感情表出は、両構文がもつ結果指向性というアスペクト的性質から生じる「発生済みで変更できない事態である(事態の不可変性)」という含意(entailment)が、文脈による推論を経て表出されるというモダリティ発生メカニズムを明らかにした。事態の不可変性というアスペクト的性質とモダリティ表出の相関性について検討することで、完了・結果指向構文におけるモダリティの表出は、構文のアスペクト性によって含意される事態の不可変性が、語用論的推論によってモダリティ表出、つまり、話者の感情の表出を引き起こしていると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、主に日本語の「てしまう」構文と英語のGet受動文を分析対象とし、そこに観察される話者の感情表出と構文のもつアスペクト的性質に相関性があることを明らかにした。このように日本語と英語で言語も異なり、形式的にも類似性をもたない形式にアスペクト性から共通性を見出したことで、日英語比較対照研究に新たな可能性をもたらすと考えられる。また、言語におけるモダリティとアスペクトの関係を明らかにしようとする研究に寄与することができたと言える。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the mechanism of how the speaker's feelings occur on the result-oriented constructions, i.e. Get-passives in English and te-shimau expressions in Japanese. My semantic investigations made it clear that, interestingly, both constructions focus strongly on the resulting state, and that events stated in the constructions already happened and cannot be cancelled. From this semantic analysis above, I claim that it is this resultative aspect of these constructions that the speaker's feelings come from via inferencing based on contexts. An attempt in this research to analyze the relation between the speaker's feelings on the constructions and their semantic properties will also lead to clarify the relation between modality and aspect.

研究分野：英語学

キーワード：てしまう Get受動文 事態の不可変性

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、日英語の完了・結果指向構文にみられる話者の感情というモダリティ的意味に着目し、その発生メカニズムと慣習化プロセスの解明を試みるものである。本研究の着想以前は次の2つの構文を主な分析対象としてきた：

- ・英語のGet 受動文 (例: Our grant got cancelled.)
- ・日本語の「てしまう (ちゃう)」構文 (例: 今日も忘れてしまった。)

これら日英語の両構文を分析対象とした理由は決して恣意的ではない。両構文には、一見すると、形式的関連性はさることながら、意味的関連すらも存在しないように見えるが、両構文ともに、話者の非難や後悔、予想外の驚きなど、情意的意味を伝達するという談話上の機能を有している (e. g. Lakoff 1971; Chappell 1980; 森田 1989; 岩澤 2001)。また、興味深いことに、両構文は意味的に完了あるいは結果性をもつという点でも共通している。例えば、Gronemeyer (1999)は、Get 受動文が状態変化によって生じた結果状態を記述する構文であると主張している。また、研究代表者自身も、2007、2008、2011、2013、2015年の研究論文において、「てしまう」構文とGet 受動文が事態の結果状態に焦点を当てるという普遍性を明らかにしている。

このような研究背景および研究成果から、「てしまう」構文とGet 受動文のモダリティは決して偶発的なものではなく、結果状態に焦点を当てるという構文自体の結果指向性が発生の動機付けになっているのではないかという仮説設定に至った。

### 2. 研究の目的

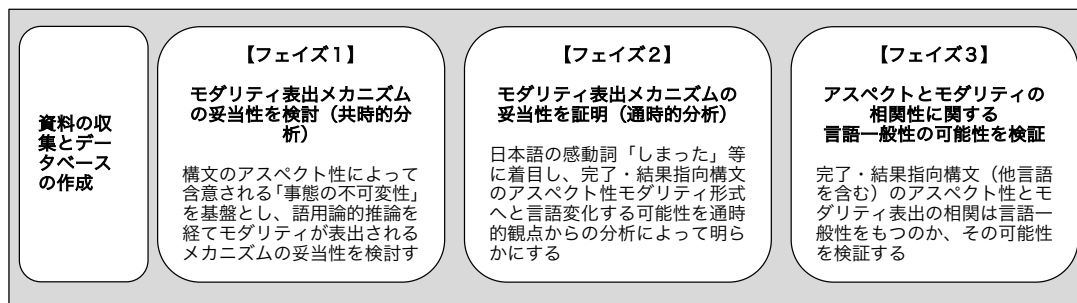
本研究は「日英語完了・結果指向構文にみるモダリティとアスペクトの相関性」と題し、2012年度科学研究費補助金採択課題若手 B「日英語結果指向構文にみる情意的意味発生メカニズムの分析とその慣習化プロセスの特定」(研究課題番号:24720216)による研究結果から得られた知見を踏まえ、言語研究におけるモダリティとアスペクトの関係の一般化を目指した発展的研究である。以下の2点を具体的な研究目的とする。

- [1] モダリティとアスペクトの相関関係の特定: 共時的観点からのアプローチ
- [2] [1]の歴史的裏付け: 通時的観点からのアプローチ

[1]と[2]を究明することにより、「てしまう」構文とGet 受動文におけるモダリティの出自を明らかにすることができるだけでなく、モダリティとアスペクトの相関性に関して、言語一般性の考察が自ずと求められることになる。

### 3. 研究の方法

本研究では以下の3つのステージを設定し、それぞれについて研究を進めた。



研究ステージ[1][想定されるモダリティ表出メカニズムの妥当性(共時的分析)]: 日英語の完了・結果指向構文のアスペクト性によって含意される「事態の不可変性」がモダリティ表出の基盤となっていることを、主に共時的観点からの分析によって明らかにする。

研究ステージ[2][想定されるモダリティ表出メカニズムの妥当性(通時的分析)]: 日本語の感動詞「しまった」等に着目し、完了・結果指向構文のアスペクト性が、モダリティ形式への言語変化を引き起こす可能性を通時的観点からの分析によって明らかにする。

研究ステージ[3][アスペクトとモダリティの相関性に関する言語一般性の検証]: 完了・結果指向構文(他言語を含む)のアスペクト性とモダリティ表出の相関は言語一般性をもつのか、その可能性を検証する。

### 4. 研究成果

上記の3つの研究ステージを経て、「てしまう」構文とGet 受動文データを観察し、以下のようにそのほとんどが話者の否定的感情あるいは予想外の喜び・驚きといった感情を表出していることを明らかにした。

- ・ ああーあ、三の宮は焼けてしまった！ (藤井 1992)
- ・ ねえ、聞いて！先生に褒められちゃった。

・Why did I get involved? There's no money in it, there's no items, no rewards. I shouldn't have gotten involved.

・Mary got admitted to Harvard! (Isn't she lucky!) (Chappell 1980)

興味深いのは、これら日英語の両構文が形式的類似性をもたないにも関わらず、そのモダリティ成分において大きな共通性が観察されることである。これを踏まえ、両者の類似性がどこから生じるのか、そのメカニズムについて検討を開始し、両構文のアスペクト的側面に焦点を当てて分析を進めた。

まず、「てしまう」構文と Get 受動文の両方ともに動的事態記述に特化していることが分かった。

- ・思わず、弱音を吐いてしまった。
- ・\*彼の自転車は体育館の裏にあったしまった。
- ・The camera got broken when he dropped it.
- ・\*He got known as the father of linguistics.

これらの例で示されるように、両構文共に「状態」のみを表す動詞（句）とは共起できず、行為や変化等の動的事態とのみ共起可能である。また、両構文のアスペクト性質において瞬時的な事態記述に特化していることも明らかになった。事実、以下のように両構文共に事態が段階的に進行することを表す副詞類とは馴染まないのである。

- ・\*次第に雨が降ってしまった。
- ・??Our house got gradually built.

更に、金田一（1955）、吉田（1971）、杉本（1991, 1992）金水（2004）らによる先行研究の知見も踏まえ、「てしまう」構文と Get 受動文の両方ともに、行為や状態変化が実際に発生し、それが完遂することに焦点を当てるというアスペクト的特徴をもつ言語形式であることを明らかにした。このようなアスペクト性をもつため、次のように「てしまう」構文では事態をキャンセルすることができない。

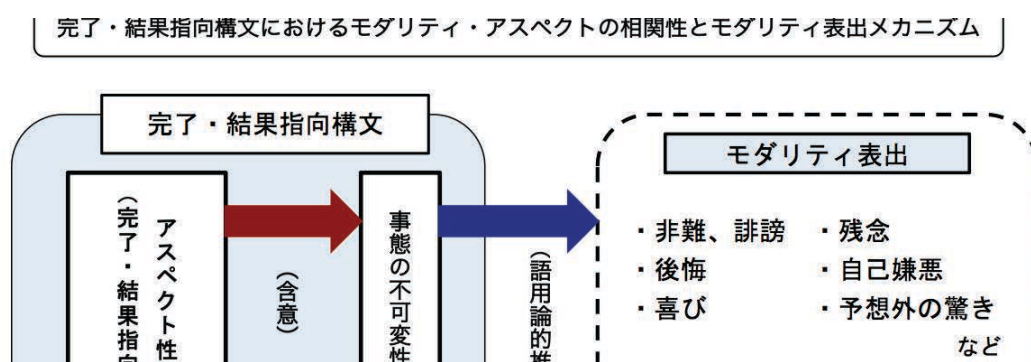
- ・お父さんは起こしても、起きなかった。
- ・??お父さんは起こしてしまっても、起きなかった。

Get 受動文でも、コーパデータを調査してみると、事態の最終局面に焦点を当てる副詞句等が多く用いられている。

- ・At the last moment, the criminal got fired in the head.
- ・I'm glad this finally got cleared up.

以上のことから、「てしまう」構文と Get 受動文は、行為や状態変化といった動的事態を瞬時的なものとして提示すると共に、その事態の発生に強い焦点を当てる形式であることを明らかにした。

以上の観察を踏まえ、このような両構文の結果指向性から生じる「発生済みで変更できない事態である（事態の不可変性）」という含意(entailment)が、文脈による語用論的推論を経て、非難や後悔などのモダリティの表出に繋がっている可能性を指摘した。これをまとめたのが以下の図である。



本研究によって、事態の不可変性というアスペクト的性質とモダリティ表出の相関性について検討することで、完了・結果指向構文におけるモダリティの表出は、構文のアスペクト性によって含意される事態の不可変性が、語用論的推論によってモダリティ表出、つまり、話者の感情の表出を引き起こしていることを明らかにした。

ただし、研究ステージ[3]に設定した[アスペクトとモダリティの相関性に関する言語一般性の検証]については、研究期間内において調査観察を行うことができなかった。本研究を基盤として、日英語や他言語における様々な完了・結果指向構文を観察し、本研究で明らかとなったアスペクト性とモダリティ表出の相関は言語一般性をもつのか、その可能性を検証していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ① 田村敏広「Get 受動文の意味と機能 -責任性と感情表出を中心にして-」Ars Linguistica 23, 査読有, 2016, 71-84.

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 田村敏広「絵本の文体と幼児期の「語り」の関連性について」日本中部言語学会, 2018 年 12 月.  
② 田村敏広「Get 受動文の意味と機能-責任性と感情表出を中心にして」日本中部言語学会, 2016 年 12 月.  
③ 田村敏広「Get 受動文の責任性と感情表出について」意味論研究会, 2016 年 12 月.

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。